

【第三種郵便物認可】

きょう11月19日に生誕100年を迎えた経営学者、ピーター・ドラッカー。「マネジメントの父」と称されるなど、氏の経営理論や考え方は死後4年たった今も強い影響力がある。厳しい経済環境に直面している経営者やビジネスパーソンにとって危機突破のヒントになるドラッカーの言葉を3人の有識者に挙げてもらい、その意義を解説してもらった。

「組織にとっては、リーダーを育てることは、製品の効率よく低コストで生産することよりも重要である」(『「企業とは何か」』)

ドラッカーは人間の考える力を重んじていた。組織を運営するには、個人の能力を開花させる必要があるという哲学の持ち主だ。個人の能力やリーダーシップを十分に発揮させる組織運営こそが「マネジメント」だ。

彼はその理由を次のように説明している。「効」としての一体感が欠け、率よく低コストで製品を生産することなど、人と組織がありさえすればいかにいかに優秀な組織と

リーダーなし 変革起きさず

「成長そのものを目標にすることはまちがいである。大きくなること自体に価値はない。よい企業になることが正しい目標である。成長そのものは虚栄でしかない」(『マネジメント』)

「成長がすべてをいやす」といった表現がある。ドラッカーはそれらとは全く異なることを言っている。成長の成長を否定する人はいないし、ドラッカーも「存続の条件としての成長の最低点は検討しておかなければならない」と指摘している。違うのは、企業にとって成長という要素だけが独り歩きしてしまうのを問うている点だ。

「あまりに急速な成長は組織を脆弱(ぜいじゃく)にし、マネジメント



いちじょう・かずお 米大大学院 教授 橋本 一樹 知識創造理論など、スイスのビジネススクールIMDでも教えている。51歳。



マネジメントの父 誕生100年

ピーター・ドラッカー 1909年11月19日にオーストリア・ウィーンで生まれる。ドイツに移り、国際法や国際関係論の博士号を取得する。ナチス政権下のドイツから英国に移住。39年に「経済人」の終わりを著し、本格的な著作活動を始める。46年に米ゼネラル・モーターズ(GM)を題材にした「企業とは

何か」がベストセラーになる。54年に企業の機能を「マーケティングとインベション」と定義した「現代の経営」を著した。同書はドラッカーの経営学の原点と言われ、多くの経営者に読み継がれている。89年には著書「新しい現実」で旧ソ連の崩壊を予測、反響を呼んだ。05年11月11日に死去。(写真はAP)

ドラッカー流で危機突破



力一学 代表 上田 博生 氏

目線は上に 常に目標を

「今日でも私は、何によって覚えられたいかを自らに問いかけている。これは、自己刷新を促す問いであり、自分自身を今日の自分とは若干違う人間として見るよう仕向けてくれる問いである」(『非営利組織の経営』)

ドラッカーは著書でも講演でも読者や聴衆に質問を投げかけることが多かった。「あなたにとって大事なものは何か」「得意なものは何か」といった具合で、そこから価値について考えさせていく。それらの中でこれは私たちがへの究極の問いかけだろう。

常に目標を持ち、よりよく変わっていく必要があると言

「誰もが、今の自分よりもよい自分、誇れる自分、すばらしい自分、しかし、なりうる自分を思い描けば、毎日の一挙手一投足がそちらに向かう」と説き、それが成功や成長につながることを経験則として知っているのだ。

成長とは、能力を習得するだけではなく、人間として大きくなることだ。目指すべきものがなければ衰退するとも言っている。「自分」を組織や事業などに置き換えても当てはまる。使命を知り、目指すべきものを定め、なすべきことをするということだ。

目標を大上段に振りかざす必要はない。ドラッカーは「世のため人のため」という意識を頭の片隅に置いてほしいとも考えていた。ほんの少し目線を上に向けようということだ。ちょっと高い目標と少しばかりの倫理を持ち続けられ、成長軌道に乗るし、道を踏み外さないはずだ。



ド会長 トンコンサルティング 功一氏

規模拡大より 働く満足追求

「成長がすべてをいやす」といった表現がある。ドラッカーはそれらとは全く異なることを言っている。成長の成長を否定する人はいないし、ドラッカーも「存続の条件としての成長の最低点は検討しておかなければならない」と指摘している。違うのは、企業にとって成長という要素だけが独り歩きしてしまうのを問うている点だ。

「あまりに急速な成長は組織を脆弱(ぜいじゃく)にし、マネジメント

「成長がすべてをいやす」といった表現がある。ドラッカーはそれらとは全く異なることを言っている。成長の成長を否定する人はいないし、ドラッカーも「存続の条件としての成長の最低点は検討しておかなければならない」と指摘している。違うのは、企業にとって成長という要素だけが独り歩きしてしまうのを問うている点だ。

「あまりに急速な成長は組織を脆弱(ぜいじゃく)にし、マネジメント